

巻頭言

「ネット」副会長

尾崎宗秀（妙高市出身）

日本画家加山又造（一九二七・二〇〇四）の私の履歴書に「兵学校で見た原子雲」と題した記述がある。

二十年の夏、山口県大島の海軍兵学校に移った。着いた日に米艦載機の実験があり、死傷者が出てしまった返っていた。兵学校では生徒と同じ作業服と戦闘帽を着用させられた。ここでも教育用の掛軸等を作った。敵機を様々な角度から描いた物を棒の先に付け、それを生徒にチラッと見せて名称を当てさせたり、（中略）或る朝蜜柑山に出た時、紫色の閃光に「瞬目が眩んだ。すると晴天の遙か彼方に、ピンク色の丸い雲がぼつかりと浮かび、かなり経った頃地鳴りの様な轟音が空気を揺るがした。八月六日私は原子爆弾の炸裂の光景を見たのである。」

その頃私は兵学校二号生徒として同じ場所（現周防大島町久賀）に居た。兵学校には東大物理学出身の教官も居られ、あれはウラン二三五による

核爆発であり、日本も理論構築は出来ていたが残念ながら……と、はつきり解説された。

昭和二十年六月総員大島へ転進する迄は、岩国分校（江田島に收容し切れず一部分校に移った）は、岩国海軍航空隊の隣接地にあり、基地には零戦、雷電、一式陸攻等エンジン轟々と翼を連ね、岩国沖には時に戦艦大和や空母天城が停泊。私達には三日間練習艦警手に乗艦実習を行った。当時学習、遭艇、陸戦訓練等に余念がなかった。艦で飛行場には複葉練習機（赤トンボ）を残し、新鋭機の特攻訓練凄まじく、爆音で教官の声が聞き取れぬ程だった。三月頃からB二九が日夜飛来し、時々生徒館周辺に傳單が降って来た。皆日本語で例えば、「軍艦の偽装、もっと松を増やしては」、小学読本をなぞって「民の瞳に煙が上らないのは、皇威に背く奸臣の仕業である」と言った揶揄と挑発であった。勿論総て回収焼却された。三月

に七十四期生をお送りし、四月に新入七十七期生を迎えた。沖の艦影殆ど無く本土空襲の迫りくる中、岩国分校總員千名は、夜間カッターを連ねて大島へ脱出した。大島での状況は冒頭引用させて頂いた加山画伯の筆の通りであり、遂に八月十五日が明けた。通信隊から洩れた噂で、玉音放送を待たずに敗戦を知った。皆冷静だった。

八月下旬、満員の客車、無蓋車を乗継ぎ、焦土と化した広島、大阪を通して歸郷した。頸城平野から峨々たる妙高山、姿優しい南栗山を仰いだ時は感慨無量。「国破山河在 城春草木深」杜甫の詩が脳裏を掠めた。

あれから六十有余年、治に居て乱を忘れず、いま舞鶴を基地とする「イージス艦妙高」と自衛官諸君が、国の守り日本の防衛に、日夜尽していることを忘れてはならないと思う。

